ベルマーク便りコンクール　入賞校を訪ねて

2018年度ベルマーク便りコンクールは73校から応募があり、財団職員が審査した結果、優秀賞10校、佳作6校、特別賞5校が決まりました。毎年のように優秀賞に選ばれる「常連校」も多いですが、今回は、初めて賞を取った学校を中心に計7校を訪問、日ごろの活動ぶりをお聞きしました。

中には、活動が岐路にさしかかり、やり方を変えて継続していこうとトライしている学校もありました。また、初めて発行したのにいきなり受賞、というラッキーな学校も。事情は様々ですが、どの学校からも、ベルマークにかける情熱と、その真摯な活動ぶりが伝わってきます。

ベルマーク便りコンクールは、2019年度も実施いたします。詳細は新年度になってから財団ＨＰと新聞紙上でお知らせしますが、応募いただいた学校には、もし受賞しなくても、参加賞として2000円の図書カードをプレゼントするのは例年と同じです。ぜひ、奮ってご応募ください。

優秀賞　札幌市立あいの里東小学校

札幌市のJR学園都市線「あいの里公園」駅から雪の中を歩くこと約5分。札幌市立あいの里東小学校(椛澤裕子校長、児童550人）は登校時間でした。8時15分、玄関のドアが開き、子どもたちが一斉に下駄箱へと殺到します。

そこに「おはよう、ベルマークウィークやってます。マーク持ってきた人は出してねー」と、PTA厚生部ベルマーク班長の髙橋宗子さんが声をかけます。子どもがマークの入った袋を出すと、「ありがとー」とハイタッチ。この朝は10人ほどがマークを持ってきてくれました。

髙橋さんは昨年、初めてベルマーク班になって、6月に札幌市で開かれたベルマーク運動説明会に参加。この運動がハンディのある学校への支援につながることを知り、自分も頑張ろうと思ったそうです。そこでまず力を入れたのがベルマーク便り。「昨年までは同じひな型でしたが、子どもたちの目にとまるよう工夫しました」と髙橋さん。便りのタイトルも「Hello! ベルマーク」に変えました。

2学期の開始時には「ベルマークウィーク」と題した収集強化週間を設定し、協力してくれた子どもの名前を発表。こうしたイベント活動の成果があがり、今年度の第1回集計では前年より1万点も多い2万4千点が集まりました。さらに2学期の最後の週と3学期の初めの週を「ベルマークウィーク2」と設定。最終的には前回の80人を上回る160人の子どもたちが参加してくれました。子どもたちには、後で感謝状と手作りのしおりをプレゼントします。

インクカートリッジの収集箱が並んでいただけの廊下の隅は飾り付け、華やかなベルマークコーナーに変身させました。高橋さんの行動力と豊富なアイデアにはとても感心させられます。

優秀賞の賞金のうち1万円は「同じ北海道の学校が大変なときなので」と、胆振東部地震への災害支援金として寄付していただきました。ありがとうございました。

特別賞　入間市立狭山小学校

「特別賞をいただき驚いています」。初応募で特別賞を受賞した埼玉県入間市立狭山小学校（酒本希朱＝さけもと・きあけ＝校長、児童432人）では、今年度から図書館推進委員会（通称図書ボランティア）がベルマーク活動を担当しています。読み聞かせや児童の図書委員の補助業務などを行う9人ほどのメンバーで、子どもが卒業後も長年続けている人もいます。ベルマークの仕分けは月一回、午前中の3時間。来るのも帰るのも自由で、保育士の仕事の合間に参加する人もいるそうです。「得意ではないけれど、皆でやると集中して出来ます」「お喋りしながら作業するのが楽しい」と和気あいあいと仕分けしています。

狭山小では一昨年までPTA学級委員会がベルマークを担当していましたが、作業が負担になるという声から活動を中止する事になりました。ところが「作業は大変だけど、ベルマーク自体は残したい」という意見も多く、何とか続けられないかと模索した結果、図書館推進委員会が引き受ける事になりました。

「活動休止後、各教室に置いてあった回収箱の中身を試しに集計したところ、9805点もあったんです。まだまだ集めてくれている方がいると分かり、子どもたちのためになるならと、話し合って引き受けることにしました」と代表の菊池千恵子さん。

ベルマークだよりは菊池さんと、同じく10年以上図書ボランティアを続ける山﨑香織さんが作っています。「活動を始めたばかりで発行数も少なく、ベルマーク以外のお知らせも載せていたので、コンクールへの応募をためらいましたが、募集要項に『活動への協力を呼びかける内容』とあったので送ってみました」。保護者に向けた真摯な呼びかけや、ボランティアで活動を再開した点が評価されました。

ベルマーク預金は図書室に置く本の購入にあてられる予定だそうです。

特別賞　福岡教育大学附属小倉小学校

福岡教育大学附属小倉小学校（服部一啓＝はっとり・かずたか＝校長、児童417人）が、初めての応募で特別賞に選ばれました。小倉小では、研修委員18人がベルマーク活動を支えています。以前は同好会「ベルちゃんズ」として月一回10人ほどで集まっていましたが、定期的に活動して盛り上げようと学校に提案し、昨年4月から委員会になりました。保護者の連絡用アプリでマーク回収日をお知らせするなど工夫しています。ベルマーク便りは四人一組で作成しています。子どもたちに親しみやすいように手書きでカラフルに、フォントも大きめで見やすくしました。各教室に掲示する際には透明ケースに入れて縁を可愛らしいテープで囲むなど目立つよう工夫しています。

ベルマーク便り第1号を作った橋本舞さんは「シンプルにわかりやすく書きました」。また、第2号を作った三山芳子さんは「誰が何を書くか話し合い、パーツごとに自宅で作成したものを持ち寄って貼り付けました」と、それぞれの工夫を話してくれました。

研修委員は「子どもたちにより良い学習を」と、科学ショーなどのイベントも企画しており、11月には国立研究開発法人防災科学技術研究所の林春男理事長による防災科学教室も実現しました。また10月の文化祭では、協賛会社のスミフルジャパン（ベルマーク番号70）のキャンペーンで当選したバナナでチョコバナナを作り、ベルマークを持参した人にプレゼントしたところ、わずか一日で三千点以上のマークが集まりました。

「ベルちゃんズ」の頃から熱心に取り組んできた研修委員長の牛嶋重美さんは、「受賞を励みに一層頑張っていきたいです」、また船瀬安仁副校長は「研修委員の方たちの頑張りが認められて嬉しい」と、共に受賞を喜びました。